




学位論文審査の結果の要旨

審査区分 ① 課・論	第672号	氏名	河野伸子
審査委員会委員		主査氏名	今井浩光 
		副査氏名	下村剛 
		副査氏名	木村成志 
<p>論文題目 Maternal overprotection predicts consistent improvement of self-compassion during mindfulness-based intervention and existential approach: a secondary analysis of the EXMIND study (母親の過保護は、マインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチにおいて、一貫して自身への思いやりの改善を予測する：EXMIND 研究の二次分析)</p> <p>論文掲載雑誌名 BMC Psychology</p> <p>論文要旨 著者らの研究グループが先に実施した、4週間のマインドフルネスに基づく介入とそれに続く4週間の実存的アプローチ (EXMIND) と8週間のマインドフルネスに基づく介入が、自身への思いやりを高めるのに効果的であるかについて検討した研究の二次解析研究である。本研究の目的は EXMIND 群において、自身への思いやりを高める予測因子を同定することであった。 研究対象は EXMIND を完了した63名のうち、ベースライン、4週間後、8週間後の「自身への思いやり尺度得点」の得られた60名であり、年齢、性別、TEMPS-A、TCI、MMSE、JART、YMRS-J、HAM-D、PBI、PILの各得点が、EXMIND 介入による自身への思いやり尺度の変化へ寄与するか否かを検討した。 参加者を自身への思いやり尺度総得点の反応パターンによって4グループに分類することが可能であった。Aグループはマインドフルネスに基づく介入で自身への思いやり尺度総得点が増加したが実存的アプローチでは得点が減少した15名、Bグループはマインドフルネスに基づく介入では得点が減少したが実存的アプローチでは得点が増加した23名、Cグループはマインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチの両方で得点が増加した20名で構成された。マインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチの両方で得点が減少したDグループは2名と少なかったため、その後の分析からは除外した。グループ間の相違を検討する一要因分散分析では、JARTで測定された推定IQおよび、PBIで測定された「16歳頃までの母親の過保護」において、3グループ間で有意な差が認められた。事後分析の結果、推定IQはAグループがBグループよりも高く、母親の過保護はCグループがA及びBグループよりも高値であった。他の要因については有意な差を認めなかった。反応パターンすなわちグループの種類を従属変数 (Cグループを参照群に設定) とし、年齢、推定IQ、母親の過保護を独立変数として、ロジスティック回帰分析を実施した結果、AグループはCグループよりも年齢が若く、推定IQが高く、母親の過保護の程度が低かった。BグループはCグループよりも母親の過保護の程度が低かった。なお、分析から除外されていたDグループの2名についても、母親の過保護が非常に低かった。 本研究は、EXMIND による介入において、母親の過保護の程度が高いほど、マインドフルネスに基づく介入においても、実存的アプローチにおいても、一貫して自身への思いやりの改善が大きくなることを示唆しており、近年臨床的な重要性が増しているマインドフルネスアプローチを始め、多様な心理療法について、対象者の特性や背景に基づいて最適な治療法を選択する臨床判断にも有用な情報を供するものである。このため、審査員の合議により本論文は学位論文に値するものと判定した。</p>			

最終試験
の結果の要旨
~~学力の確認~~

審査区分 ①・論	第672号	氏名	河野伸子
審査委員会委員	主査氏名	今井浩光	②
	副査氏名	下村剛	③
	副査氏名	木村成志	④
<p>学位申請者は本論文の公開発表を行い、各審査委員から研究の目的、方法、結果、考察について以下の質問を受けた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. マインドフルネスとは、どのようなものか。瞑想との相違は何か。 2. マインドフルネスに基づく介入法の詳細について説明せよ。 3. マインドフルネスと実存的アプローチの関係性について、特に相反する介入である可能性の詳細について説明せよ。 4. 自身への思いやり尺度 (SCS) の評価の詳細、評価の再現性、日本人母集団値など、評価法としての信頼性、妥当性に関して説明せよ。 5. 各群のベースラインでのSCS得点の相違はどうであったか。 6. SCSの得点の変動が意味することは何か。 7. PBIによる評価される「母親の過保護」の概念を説明せよ。 8. EXMIND介入についての被験者の取り組みの度合いを評価したか。 9. 評価項目の選択はどのようにして行ったのか。 10. 解析方法について、ANOVAで項目を絞ってロジスティック回帰分析を行った理由は何か？ 11. ロジスティック回帰分析に全ての項目を入れてモデル式を作成するとどのような結果が予想されるか？ 12. 得られたモデル式を今後どのように応用する予定か。 13. カテゴリーによる分析に加えて、すべての被験者について母親の過保護の程度とEXMIND介入によるSCS改善の程度の相関は評価したか。 14. マインドフルネスアプローチで、SCSが低下する被験者がいることについて、この現象をどのように分析するか。 15. EXMINDと比較して、IPT及びCBTでは効果が違うのはなぜか。 16. 今回得られた知見は、今後の心理臨床でどのように活かされるか。 <p>これらの質疑に対して、申請者は概ね適切に回答した。よって審査委員の合議の結果、申請者は学位取得有資格者と認定した。</p>			

学 位 論 文 要 旨

氏名 河野 伸子

論 文 題 目

..... Maternal overprotection predicts consistent improvement of self-compassion during mindfulness-based intervention and existential approach: a secondary analysis of the EXMIND study

..... (母親の過保護は、マインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチにおいて、一貫して自身への思いやりの改善を予測する：EXMIND研究の二次分析)

要 旨

目的:

..... 私どもは最近、4週間のマインドフルネスに基づく介入とそれに続く4週間の実存的アプローチ（以下、EXMIND）が、8週間のマインドフルネスに基づく介入と同様に、自身への思いやりを高めるのに効果的であることを明らかにした。本研究の目的は、EXMINDにおいて、自身への思いやりを高める予測因子を同定することである。

研究対象および方法:

..... EXMINDを完了した63名のうち、ベースライン、4週間後、8週間後の自身への思いやり尺度得点の得られた60名を分析に用いた。女性49名、男性11名、平均年齢は48.4歳であった。年齢、性別、Temperament Evaluation of Memphis, Pisa and San Diego Auto-questionnaire, Temperament and Character Inventory, Mini-Mental State Examination, Japanese Adult Reading Test, Young Mania

Rating Scale, Hamilton Rating Scale for Depression, Parental Bonding Instrument, Purpose in Life Test の各得点を、参加者の反応パターンに基づいて分散分析で比較し、さらに、予測因子を同定するためにロジスティック回帰分析を実施した。

結果と考察：

参加者は、自身への思いやり尺度総得点の反応パターンによって4グループに分けられた。Aグループはマインドフルネスに基づく介入で自身への思いやり尺度総得点が増加したが実存的アプローチでは得点が減少した15名、Bグループはマインドフルネスに基づく介入では得点が減少したが実存的アプローチでは得点が増加した23名、Cグループはマインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチの両方で得点が増加した20名で構成された。マインドフルネスに基づく介入と実存的アプローチの両方で得点が減少したDグループは2名と少なかったため、その後の分析からは除外した。グループ間の違いを見るために一要因分散分析を実施したところ、Japanese Adult Reading Testで測定された推定IQおよび、Parental Bonding Instrumentで測定された、16歳頃までの母親の過保護において、3グループ間で有意差が見られた。事後分析の結果、推定IQはAグループがBグループよりも高く、母親の過保護はCグループがAグループやBグループよりも高かった。他に、年齢が有意傾向となったが、それ以外の項目では有意差がなかった。次に、反応パターンすなわちグループの種類を従属変数（Cグループを参照群に設定）とし、年齢、推定IQ、母親の過保護を独立変数として、ロジスティック回帰分析を実施した。その結果、AグループはCグループよりも年齢が若く、推定IQが高く、母親の過保護の程度が低かった。BグループはCグループよりも母親の過保護の程度が低かった。なお、分析から除外されていたDグループの2名についても、母親の過保護が非常に低かった。

本研究の限界は、対象者数が比較的少なく、中年期の女性に偏っていることや、過保護の評価が記憶に頼っていることなどである。

結語：

本研究の結果は、EXMINDにおいて、母親の過保護の程度が高いほど、前半のマインドフルネスに基づく介入においても、後半の実存的アプローチにおいても、一貫して自身への思いやりの改善が大きくなることを示唆している。